

## 心理学による国際支援

はら だ たか ゆき

原田隆之

臨床心理学・犯罪心理学



私は臨床心理学を専門としています。臨床心理学は、心理学のさまざまな分野の中でも応用心理学の1つであり、学術的な知見を実際に応用して、社会的な善の実現に貢献することがその使命だといえます。私の研究と実践は、臨床心理学の中でも犯罪者や非行少年、特にアディクション（薬物依存症や性的依存症）の人たちを対象としているため、かなり特殊な人々を相手にしているといえるかもしれません。

日本ではこの分野の専門家が非常に少ないのですが、欧米ではとても多くの心理学者が活躍しており、多くの優れた業績を残しています。これは、わが国に比べて欧米社会のほうが、犯罪やアディクションの問題がはるかに深刻な状況にあるからであり、この意味では日本社会はまだずっと健全な社会であるといえるでしょう。

その反面、日本の犯罪心理学の専門家にとっては、活躍の場が限られているということでもあり、良いような悪いような状況であるといえるかもしれません。犯罪心理

学者は、もちろん犯罪が起こるのを待ち構えているわけではありませんので、犯罪が少ないに越したことはありません。しかしその反面、研究の対象が外国に比べて少なく、実践の場も限定されているということは、十分な貢献ができないということにもなりかねず、ここにわれわれの抱えるジレンマがあります。

そのような中、思わぬ大きな仕事を引き受けることとなりました。それは、私の専門を生かしての国際貢献の仕事です。私はかねてから、心理学のほかに、途上国支援や国際貢献にも大きな関心を持っており、国際協力機構（JICA）に関わったり、国連で仕事をしたりした経験がありました。そして今回、首相官邸からの依頼でフィリピンの薬物問題を支援する仕事をするようになったのです。

大きく報道されたためご存知の方も多いと思いますが、2016年6月に就任したフィリピンのドゥテルテ大統領は、「薬物戦争」と称し、薬物撲滅に向けて薬物使用者の殺

害も辞さないと言明し、実際これまで数千人も人が殺害されたとのこと。裁判もせずに問答無用で「抹殺」してしまうという超法規的措置に対し、国際社会は激しい批判をしています。ただフィリピンの薬物問題は非常に深刻で、中でも覚せい剤依存者の数は、300万人といわれ世界最悪です。

こうした状況のなか、2016年10月にドゥテルテ大統領が訪日した際、安倍首相は薬物問題の解決のため、薬物依存症者の治療やリハビリに対する支援を申し出ました。この申し出は、フィリピン側にも大歓迎で迎えられ、官邸の号令の下、JICAを中心に支援プロジェクトが急ピッチで進められることになったのです。12月には、フィリピン支援のための調査ミッションが生まれ、各省庁の担当者と私は、総理補佐とともにマニラに出張しました。

現地に着いたわれわれを待っていたのは、マニラ名物のものすごい渋滞とスコールでした。渋滞をかいくぐり空港から日本大使館に直行し、そこで結団式を行った後、マニラ郊外にある薬物依存治療施設に向かいました。施設に着いた途端、台風のような大雨が降り始め、中で説明を受けても声がかき消されてしまうほどでした。そして、そこで私は予想だにできなかった光景を見て愕然とします。それは、大人に混じってまだ小学生の子どもたちが大勢収容されてい

たことです。大人の大部分は、覚せい剤依存者ですが、子どものほとんどは、有機溶剤（シンナーやボンド）を吸引していたのだと説明を受けました。

フィリピンには厳格なカトリック信者が多く、中絶はご法度だとのこと。したがって、子沢山の家が多く、貧しい家庭では子どもに十分な食事を与えることができません。そのため、貧しい家庭の子どもたちは、空腹を紛らわせるために有機溶剤を吸引するのです。食べ物よりもこれらの薬物はずっと安価に入手でき、その薬物の作用のためいつとき空腹を忘れることができます。つまり、フィリピンに到着して間もなく私は、フィリピンの薬物問題の根底には深刻な貧困の問題があるという事実を目の当たりにしたのです。

一方、成人の間に乱用が蔓延している覚せい剤は、世界で初めて日本人が合成した薬物です。しばらくは日本のみで乱用が広がっていましたが、1990年代ころから世界中に広まってしまいました。アジアでは「シヤブ」という言葉までもがそのまま使われています。元々、日本人が蒔いた「悪の種」である覚せい剤。刈り取るのは、やはりわれわれ日本人の責任だといえるでしょう。これから私は銃や刃物ではなく、心理学の力で薬物問題の根絶に向け戦っていきたいと思っています。